

口頭発表「特別支援学級での動物飼育実践と保護者の反応」

三本隆行



1はじめに

人とのかかわりへの課題など様々な発達障害を抱える特別支援学級の児童たちに、動物とかかわらせてることで、動物への親しみ、興味、関心を深めさせることができるか、またその体験により「生命の大切さ」、「他者への思いやり」を考えさせることができるか、などの可能性について探ることとした。同時に、特別支援学級の児童たちが動物とふれあい続けることで、その影響や情緒や行動などに変化が現れるか、などを調査検討することにした。

2目的

日内リズムの確立やスキルトレーニングに加えて、動物に対する親近感の獲得および生命の実感、さらには動物とのコミュニケーションを通じてセルフエスティーム（自尊感情）を高めることを目的とした。

3方法

奈良県内小学校3校の特別支援学級で、モルモットの教室内飼育を実施した。生活単元学習のテーマを「どうぶつ」として、動物園への遠足に始まり、動物園園長からの依頼という設定でモルモットの飼育を始めた。特別支援学級の児童25人（3校合計）、各小学校1～2頭ずつ、2008年5月から現在まで飼育を継続している。土日休日および長期休暇には、原則として児童の家庭にモルモットを持ち帰っている。

(1) 獣医師が10日～2週間に1回の間隔で、下記の授業を行った。

<第1時限>「モルモットがきたよ」
モルモットの習性や飼育方法の話（保護者アンケート1回目）

<第2時限>「モルモットはげんきかな？」モルモットの身体測定と健康診断

<第3時限>「いろいろなどうぶつとふれあおう」イヌ、ネコやぬいぐるみとモルモットの違い（保護者参観）

<第4時限>「モルモットをかってわかったこと」モルモットの行動や鳴き声から気持ちを推測させる

<第5時限>「モルモットのしんぞう」心音聴取と心電図から生命を実感させる（保護者アンケート2回目）

(2) 飼育開始時の全般的な反応

<ダウン症>モルモットがこわい、さわれない（遠足で動物園に行った時、教師に無理矢理ヤギやウサギに触れさせられたため）

<自閉症圏>モルモットの感触を確かめる。モルモットよりも水入れや飼育ケースに関心をもつ。

<ADHD>座って静かに獣医師の話を聞く。モルモットを抱いてみる

(3) 行動特徴の数値化

保護者に飼育開始時と飼育開始4～6カ月後にアンケート調査を実施した。

毎日モルモットにふれていた児童3名（それぞれADHD、軽度知的障害、自閉症圏）は、社会性、コミュニケーション力、想像力の3項目において、飼育開始時よりも4～6カ月後の調査数値の方が上回っていた。

この調査は、教育大学障害児教育学教室の指導の下、特別支援学級担当教師、スクールカウンセラーである臨床心理士、心理福祉学部心理学科学生そして獣医師の4者のチームで行われ、児童の観察、保護者の反応などの分析を行った。調査方法は、おもに学級での児童の行動観察と保護者への面接とアンケート調査で行われた。

(4) 保護者へのアンケートから

- ・共通の話題を家族でもてた。
- ・家庭を明るくした（全体 最多回答数）
- ・持ち帰ったモルモットを親が世話しているところを子どもに見せられた。
- ・モルモットに关心を持ち、少しさわれるようになった

(ダウン症 最多回答数)

- ※自分より弱い者の存在を知った.
- ※「かわいい」という感情を素直に出してくれた.
- ※どうすれば「気に入ってくれるか」、「喜んでくれるか」を考えながら接していた.
- ※「かわいがり方」を学んだ.
- ※家で人形を並べて世話をする遊びを始めた.
- ※全てを子どもにまかせることはできなかった.
- ※動物飼育の経験を対人関係に生かしてほしい.

(※印は自閉症圏児童保護者の回答)

(5) 担当教師の感想

- ・「どうぶつ」の単元が飼育することにより深まった.
- ・飼育がなければ「どうぶつ」はこわいだけのイメージで終わっていた.
- ・特別支援学級に活気が出た.
- ・普段は会話もしない低学年と高学年の児童が、モルモットを介してゆったりと話している光景が多く見られた.
- ・劇的に変化を見せた児童がいた.
- ・「ネズミが苦手」、「動物がこわい」教師にとって、児童の前でモルモットに触れることを平気に見せるすることは想像以上につらかった.
- ・特別支援学級の人数が多すぎて、世話をする当番がなかなかまわってこなかつた.
- ・生命の大切さは、身近な人や動物が死なないとわからないかも知れない.

(6) スクールカウンセラー(臨床心理士)の意見

- ・自閉症圏の児童が、自宅で人形を並べて世話をする遊びをすることは、実際の動



物飼育から逃避していることである.

- ・自閉症圏の児童にとってモルモットは「動くおもちゃ」と同じである.

<上記の意見については担当教師から反論があった>

- ・モルモットの飼育を始めてから、2名の自閉症圏児童が自宅で人形を並べて世話ををする遊びをするようになった.
- ・1名は、学校でのモルモットの世話を「僕は(人形たちの世話が)忙しいからモルモットのことまで手がまわらないよ。」と話し、スクールカウンセラー指摘のように、モルモットから逃避していた。残りの1名は、学校でのモルモットの飼育と同じような条件を作り、自宅で練習してから学校で実践していた。これは逃避とはいえない。
- ・また、自閉症圏の児童たちは個々の考え方には差はあるものの、モルモットに対して愛情をもちかわいがり、モルモットの予測不能な動きに対して決して乱暴な行為をしなかった。

(7) 獣医師の反省

特別支援学級の児童たちのコミュニケーションは、安心して接することのできる人間に対してはとても濃いものである。1週間に2~3回教室に顔をみせる獣医師に対して、手をつなぐ、腕を組む、背中に乗る、抱きつくというような行為は当たり前のようになり、獣医師も児童たちに対して愛情を感じるようになる。「この児童はもっとできるだろう。」というような期待感や希望をもち、冷静に児童個々の観察や分析ができなくなってしまった。担当教師に相談したところ、教師自身も同様の感情を持っていると聞き安心したが、今後の課題となり得るであろう。

(8) 児童たちのエピソード

<たっくん> 3年生 男子 自閉症圏

モルモット導入の当日、授業時間終了5分位前から、「早く帰りたい。早く帰りたいよ。」と大きな声で叫んだ。獣医師も担当教師も、モルモットの飼育を始めることが気に入らなくて早く下校したいのだと思っていた。しかし、翌日保護者から「学校でモルモットを飼い始めたことを早く家族に知らせたくて帰りたくなったらしい。」と聞き安堵した。

また、今まで運動会の練習や歌の発表など、人前で何かをすることを嫌っていた。

モルモットを飼育し始めて、まずモルモットに見聞きしてもらうことで自信をつけ、保護者参観で劇と歌の発表が初めてできた。

〈もえちゃん〉 3年生 女子 自閉症圏

彼女にとって、初めてモルモットにふれた感覚は「チクチク」。抱いた時に、モルモットの爪が当たった感覚が最も大きな印象になったのであろう。教師や獣医師の見ている前でモルモットにさわろうとはしなかった。

5ヶ月後、自分のシャツでモルモットを包むように抱き、「ふわふわだよ」と話した。

〈けいくん〉 5年生 男子 自閉症圏

授業中、教師と言い争いになったけい君。通常ならば、教師に殴りかかるか、教室を飛び出して行くことが多い。突然、教室の後方に置いているモルモットの飼育ケースからモルモットを取り出した。教師は、「モルモットに危害を加えるかも知れない」と思ったが、けい君は静かにモルモットを抱きクールダウンすることができた。

〈まりちゃん〉 5年生 女子 不登校

数ヶ月間ほとんど登校していない状況の中、特別支援学級でモルモットを飼育していることを聞いた。以来、毎朝、特別支援学級の教室のカギが開くのを待ち、中休みも昼休みもモルモットと過ごしている。通常学級の担任も、学校へ来ているのであれば、と許している。

〈N君〉 5年生 男子 自閉症圏

自分でモルモットの世話ができる。下級生にもその様子を見せることができて、本人のセルフエスティームは高まった。土日

はすすんで自宅にモルモットを連れて帰った。しかし、独占欲が強くなり、無理やりモルモットを強く抱きしめたり振り回す行動が見られ、教師から何度も注意を受けた。



4 まとめ

8ヶ月のモルモットの飼育活動の間に、児童たちは、それぞれの発達段階に応じた世話や関わり方をし、動物飼育が特別支援学級の児童にも多様な影響を与えたことが認められた。

また、保護者との面接やアンケート調査から、家庭における児童の生活態度にも変化が見られたなど、身近な飼育活動の有効性が認められた。

特別支援学級での動物飼育は決して難しいことではないが、担当教師と獣医師は常に連絡を取り合う体制が必要であると思われる。

（（社）奈良県獣医師会

／帝塚山大学非常勤講師）

